

「ぶれずに信じる道」 ハンセン病隔離に抵抗した医師の映画完成

毎日新聞 2021/5/27 12:23 (最終更新 5/27 19:57)

厳しい偏見と差別にさらされたハンセン病患者に戦前から寄り添って治療を続け、国策の「患者隔離」に抵抗した医師で僧侶の小笠原登（1888～1970）。その生き様を描いたドキュメンタリー映画「一人になる」（1時間39分）が完成した。プロデューサーの鵜久森典妙（うくもりのりたえ）さん（72）＝兵庫県西宮市＝は「現在の新型コロナウイルスでも感染者や家族、医療従事者への偏見や差別が問題になっている。小笠原の生きた時代、生き方に学ぶことは現在にも通じる」と話す。6月4日から京阪神で順次公開される。

国策や医学界に一人で抵抗

ハンセン病は感染力が弱いですが、国は96年に「らい予防法」を廃止するまで約90年間、「強烈な伝染病、不治の病」と誤って患者や家族の人権を無視する強制隔離や断種手術を続けた。

これに対し、真宗大谷派の「円周寺」（愛知県あま市）に生まれ、1915年に京都帝大医科大（現京大医学部）を卒業した小笠原は京大病院で患者に寄り添う治療を実践。「感染力が弱く、治る病気。隔離は不要」とし、療養所への入所を望まない患者のカルテには病名を書かなかつたり、「皮膚炎」など別の病名を記したりして国策や医学界に一人で抵抗した。戦後、京大病院を退いた後も国立豊橋病院（同県豊橋市）に勤務しながら円周寺で患者の治療を続け、国立療養所「奄美和光園」（鹿児島県奄美市）にも赴任。82歳で亡くなった。

2019年6月の熊本地裁判決は、隔離政策で差別を受けた元患者家族に対する国の責任を認め、家族への賠償を命じた。この年は小笠原の五十回忌に当たり、功績を知る人たちが、老朽化した円周寺が建て替えられる前に映像で残したいと念願。記録映画「もういいかい ハンセン病と三つの法律」を作った鵜久森さんと、監督の高橋一郎さん（67）＝神戸市須磨区＝に相談した。

高橋監督は「家族訴訟の熊本地裁判決は人権啓発教育の不在も指摘し、私たちも重く受け止めた。ハンセン病差別の実態と、群れず、ぶれずに信じる道を歩ん

だ医師の存在を伝える映画にしたい」と快諾したという。

小笠原の治療を受けた元患者やハンセン病研究者らの証言、日記に基づく再現ドラマなどを19年9月末から撮影。20年秋の完成予定がコロナ禍の影響で遅れたが、21年3月に女優の竹下景子さんの語りの録音を済ませて完成した。

6月4日、大阪市のシアターセブン（06・4862・7733）で上映会と、ハンセン病の元患者や高橋監督らによるシンポジウムを開催。4日から京都市の京都シネマ（075・353・4723）▽5日からシアターセブン▽12日から神戸市の元町映画館（078・366・2636）で上映する。問い合わせは映画製作委員会（072・845・6091）。

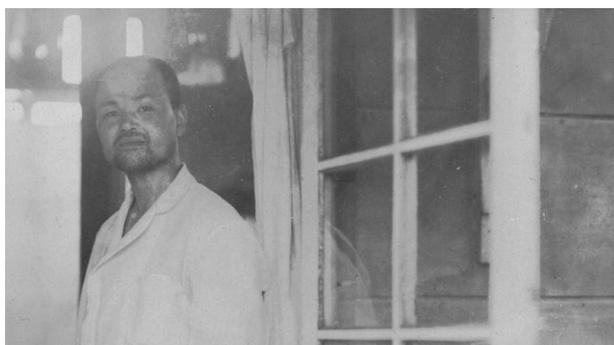
【北出昭】



ハンセン病患者に寄り添う治療をした小笠原登の姿を再現したシーン＝映画「一人になる」より（「一人になる」制作実行委員会提供）



映画「一人になる」の高橋一郎監督＝大阪市北区で2021年5月13日午前11時57分、北出昭撮影



生前の小笠原登＝「一人になる」制作実行委員会提供



映画「一人になる」で証言するハンセン病元患者の竹村貴美子さん＝「一人になる」制作実行委員会提供